

令和7年12月19日

## 文化審議会の答申（史跡名勝天然記念物の指定等）

文化審議会（会長 しまたに ひろゆき 島谷 弘幸）は、令和7年12月19日（金）に開催された同審議会文化財分科会の審議・議決を経て、特別史跡の新指定1件、史跡名勝天然記念物の新指定8件・追加指定等27件、登録記念物の新登録6件及び重要文化的景観の新選定1件・追加選定1件について、文部科学大臣に答申しました。今回答申された史跡等の指定等の詳細は、別紙のとおりです。

この結果、官報告示を経て、史跡名勝天然記念物は3,398件、登録記念物は149件、重要文化的景観は74件となる予定です。

### <担当> 文化庁文化財第二課

課 長

田中 禎彦

課 長 補 佐

上田 和輝

主任文化財調査官（史跡部門）

渋谷 啓一 （内線9767）

主任文化財調査官（名勝部門）

平澤 毅 （内線9776）

主任文化財調査官（天然記念物部門）

江戸 謙顕 （内線9778）

主任文化財調査官（埋蔵文化財部門）

近江 俊秀 （内線9766）

主任文化財調査官（文化的景観部門）

市原 富士夫 （内線9770）

審 議 会 係 長

今村 結記 （内線9757）

電話：075-451-4111（代表）

別 紙

史跡名勝天然記念物

(令和7年12月19日現在)

種 別	現在指定件数	今回答申件数			合計（現在指定件数と 答申件数との合計）
		新指定	解除	統合に よる減	
史 跡 (うち特別史跡)	1, 917 (65)	6※ (1)	0 (0)	0 (0)	1, 923 (66)
名 勝 (うち特別名勝)	432 (36)	1 (0)	0 (0)	0 (0)	433 (36)
天然記念物 (うち特別天然記念物)	1, 041 (75)	1 (0)	0 (0)	0 (0)	1, 042 (75)
合 計 (うち特別史跡名勝天然記念物)	3, 390 (176)	8 (1)	0 (0)	0 (0)	3, 398 (177)

※ 特別史跡の新指定「恭仁宮跡」は、すでに史跡指定されているため、新指定件数6件に含まれない。

(備考)

件数は、同一の物件につき、二つの種別に重複して指定が行われている場合（例えば、名勝及び天然記念物など）、それぞれの種別につき1件として数えたものです。

なお、重複指定物件を1件として数えた場合、

現在指定件数は、 3, 275件

答申後合計件数は、 3, 283件 です。

## 登録記念物

(令和7年12月19日現在)

種 別	現在登録件数	今回答申件数		合計（現在登録件数と 答申件数との合計）
		新登録	抹 消	
遺跡関係	13	1	0	14
名勝地関係	124	5	0	129
動物、植物及び 地質鉱物関係	6	0	0	6
合 計	143	6	0	149

(備考)

件数は、同一の物件につき、二つの種別に重複して登録が行われている場合（例えば、遺跡関係及び名勝地関係など）、それぞれの種別につき1件として数えたものです。

なお、重複登録物件を1件として数えた場合、

現在登録件数は、142件

答申後合計件数は、148件 です。

## 重要文化的景観

(令和7年12月19日現在)

種 別	現在選定件数	今回答申件数		合計（現在選定件数と 答申件数との合計）
		新選定	解 除	
重要文化的景観	73	1	0	74

## 「新指定・新登録・新選定」答申物件

### 《特別史跡名勝天然記念物の新指定》

#### 【特別史跡】 1件

「<sup>てんぴょう</sup>天平12年（740）に遷都し以後3年3ヵ月営まれた<sup>きゅうと</sup>宮都。後に<sup>やましるこくぶんじ</sup>山城国分寺となった」

#### 1 <sup>く に きゅうせき</sup>恭仁宮跡（<sup>やましるこくぶんじあと</sup>山城国分寺跡）【<sup>きづがわし</sup>京都府木津川市】

天平12年（740）に聖武天皇が遷都を宣言し、以後3年3ヵ月営まれた宮都。平城還都後に<sup>だいごくでん</sup>大極殿が山城国分寺に施入された。<sup>だいごくでん</sup>大極殿<sup>きだん</sup>基壇や国分寺の<sup>とうきだん</sup>塔基壇が残り、発掘調査により<sup>ちょうどういん</sup>朝堂院や2つの<sup>だいり</sup>内裏相当の区画等が見つかった。<sup>こくぶんじこんりゅう</sup>国分寺建立の<sup>みことのり</sup>詔等、重要な法令が出された宮跡であり、古代宮都の変遷やあり方を伝えるきわめて重要な遺跡である。



提供：木津川市

### 《史跡名勝天然記念物の新指定》

#### 【史跡】 6件

「北東北における中世後半期の政治的、軍事的情勢とその変化を知る上で重要な<sup>さかいめ</sup>境目の城」

#### 1 <sup>でわのくに</sup>出羽国<sup>でわかねざわじょうあと</sup>金沢城跡【<sup>よこてし</sup>秋田県横手市】

<sup>でわのくに</sup>出羽国北部の横手盆地内における大規模な<sup>ぐんかくしき</sup>群郭式構造の山城。室町期は<sup>なんぶ</sup>南部氏、戦国期は<sup>こくじんりょうしゅかねざわ</sup>国人領主金沢氏の本拠の城で、戦国大名<sup>おのでら</sup>小野寺氏・<sup>ろくごう</sup>六郷氏勢力における境目の城。北東北における中世後半期の政治的、軍事的な情勢とその変化を知る上で重要。



提供：横手市

「美濃国守護土岐氏の拠点城郭。戦国時代における守護大名の本拠地の構造を知る上で重要」

## 2 大桑城跡【岐阜県山県市】

16世紀前半から中頃に機能した政治的空間と居住空間を備えた美濃国守護土岐氏の拠点城郭。戦国時代における守護大名の本拠地の構造を知るだけでなく、美濃国騒乱の舞台となった城でもあり、周辺諸国の諸勢力の動向も含めた、当時の社会的、政治的動向を知る上でも重要。



提供：山県市

「古代国家の幹線道路網のひとつ。古代官道の路線選定や構築法を知る上で重要」

## 3 因幡国山陰道跡【鳥取県鳥取市】

平野部から丘陵部にいたる、全長3kmの古代官道の実態を明らかにすることができた全国でも稀有な遺跡。多様な作道工法や山間部における路線選定の在り方等、古代の土木技術だけでなく交通の実態を知る上で重要。



提供：鳥取県埋蔵文化財センター

「天正年間に繰り広げられた毛利氏・織田（羽柴）氏の攻防戦の最前線にあった山城跡」

## 4 羽衣石城跡 附 十万寺城跡 番城城跡【鳥取県東伯郡湯梨浜町】

戦国期伯耆国の国人領主・南条氏の拠点で、天正年間に繰り広げられた毛利氏・織田（羽柴）氏の攻防戦の最前線にあった山城跡。4つの独立した曲輪群で構成され、その南北に十万寺城・番城城の出城が展開する。戦国期における山陰地方の政治状況の変化を知る上で重要。



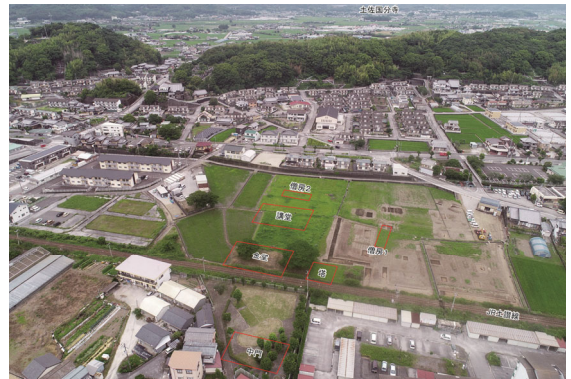
提供：湯梨浜町



「8世紀中頃創建の古代寺院跡。国分寺造営による地方の造寺の在り方を知る上で重要」

5 <sup>の なかは い じ あと</sup>野中廃寺跡【<sup>なんこくし</sup>高知県南国市】

四国で唯一、<sup>がらん</sup>伽藍の全貌が明らかになった寺院であり、<sup>こんどう</sup>金堂の規模も<sup>と さ こくぶんじ</sup>土佐国分寺に匹敵し、<sup>ほりこみちぎょう</sup>かつ精緻な掘込地業を行う本格的な伽藍。国分寺造営が<sup>ぐんじ</sup>郡司層の造寺活動を活発化させたことを示す典型的な事例であり、古代における寺院造営を考える上で重要。



提供：南国市

「琉球王国の影響を受けていた沖永良部島に見られる、<sup>まえにわ</sup>前庭を持つ大型石造り掘込墓」

6 <sup>おきのえらぶじま こ ぼぐん</sup>沖永良部島古墓群【<sup>おおしまぐんわどまりちょう</sup>鹿児島県大島郡和泊町・<sup>ちなちよう</sup>知名町】

<sup>よ の めし はか</sup>世之主の墓

<sup>しんじょうはなくぼ</sup>新城花窪ニヤートウ墓 <sup>ばか</sup>

<sup>やじや</sup>屋者ガジマル墓 <sup>ばか</sup>

アーニマガヤトゥール墓 <sup>ばか</sup>

<sup>あまみ</sup>奄美群島に見られる、岩壁を横方向に掘り込む形式の遺骨を納める墓所のうち、<sup>りゅうきゅうおうこく</sup>琉球王国の影響を受け、削り出した岩壁や石積みの壁を設けた前庭を持つ大型石造り掘込墓。奄美と沖縄、さらに九州南部等との文化交流を示す貴重な遺跡として重要。



世之主の墓 提供：和泊町



屋者ガジマル墓 提供：知名町

【名勝】 1件

「<sup>つきやま ち せん</sup>離れの建築とともに整備された築山池泉と室内の観賞に特徴ある大正時代の住宅庭園」

1 <sup>せいせんえん</sup>静川園【<sup>きた つ が る ぐ ん な か ど ま り ま ち</sup>青森県北津軽郡中泊町】

津軽半島中央部にある近代住宅庭園で、大きな<sup>ちわり</sup>築山を地割の中心として池泉を巡らせた<sup>しょうようほん い</sup>逍遥本位の庭と、離れ「<sup>し む あん</sup>詩夢庵」とこれを取り巻く観賞本位の庭などから成り、文化人との交流で育まれた趣向に基づき近代地主が自ら<sup>さはい</sup>差配して造営した事例として優れている。



提供：中泊町

【天然記念物】 1件

「世界的に有名なユリ属の園芸品種の原種のひとつであるカノコユリの国内最大規模の生育地」

1 <sup>こしきしまかたのうら</sup>甑島片野浦のカノコユリ群落【<sup>さつ ま せん だ い し</sup>鹿児島県薩摩川内市】

カノコユリは、シーボルトが持ち帰り紹介したことで西洋において高く評価されたユリ属の植物で、オリエンタルハイブリッドで有名な「カサブランカ」など多くの園芸品種の原種である。<sup>しもこしきしま</sup>下甑島西海岸の片野浦には、土砂崩落と強風で維持されている自然草原が成立しており、カノコユリの国内最大規模の生育地である。



提供：薩摩川内市

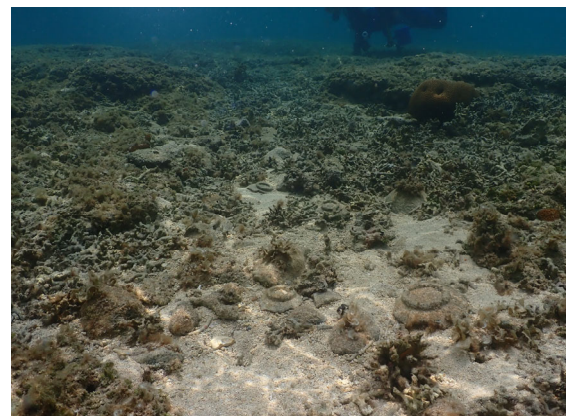
《登録記念物の新登録》

【遺跡関係】 1件

「<sup>く め じ ま</sup>久米島東部の海域に所在する14世紀末～15世紀初頭の貿易陶磁器散布地」

1 <sup>あ が り お う お き い せ き</sup>東奥武沖遺跡【<sup>しまじりぐん く め じ ま ち ょ う</sup>沖縄県島尻郡久米島町】

久米島東部の<sup>あ が り お う</sup>東奥武（<sup>じ ま</sup>オーハ島）の海域に所在する14世紀末～15世紀初頭の陶磁器散布地。<sup>あ が り お う</sup>東奥武（<sup>じ ま</sup>オーハ島）の南東方向に伸びる浅瀬を起点に分布しており、海難事故によって形成されたと想定される。当該期に最盛期を迎える琉球の明国への朝貢貿易の様相を知るうえで重要。



撮影：亀島慎吾



【名勝地関係】 5件

「昭和15年（1940）に作庭家の重森三玲<sup>しげもりみれい</sup>によって造られた枯山水の住宅庭園」

1 斧原氏庭園【兵庫県西宮市】  
<sup>おのはら していえん</sup> <sup>にしのみやし</sup>

昭和15年に作庭家の重森三玲によって造られた枯山水の住宅庭園。奥の築山に多くの石組を施し、その山裾の前を左から右へ直線的にのびる白砂の曲水が、逆S字を描きながら、横方向に長く突き出た2つの出島を大きく回り込んで手前に至る。



提供：西宮市

「昭和40年（1965）に作庭家の重森三玲<sup>しげもりみれい</sup>によって造られた枯山水の住宅庭園」

2 清原氏庭園【兵庫県芦屋市】  
<sup>きよはら していえん</sup> <sup>あしやし</sup>

昭和40年に作庭家の重森三玲によって造られた枯山水の住宅庭園。周囲を建物に囲まれた長方形の敷地に、玉石、敷石、白砂、コケ類を用いて雲のような形を描き出し、8つの青石を直線的に据える。

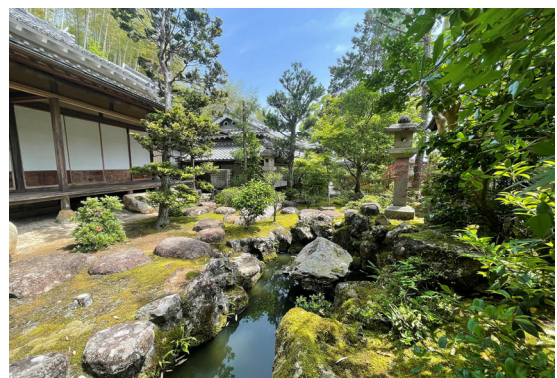


提供：芦屋市

「石材などを取り扱う商人であった高原重太郎が、明治末期に自邸に整備した池泉庭園」

3 旧高原氏庭園【兵庫県加西市】  
<sup>きゅうたかはら していえん</sup> <sup>かさいし</sup>

石材などを取り扱う商人であった高原重太郎が、明治末期に自邸に整備した池泉庭園。山裾の地形を利用した上下二段からなり、上段には「奥座敷」、流れ、園池が、下段には「中座敷」と園池が設けられ、園内に打たれた飛石が上段と下段をつなぐ。



提供：加西市



「大穴の開いた岩峰と中腹が赤く染まった岩峰から成る景勝地」

4 ウトノアナ・ゼゼノサマ【大分県豊後高田市】

くにさき 国東半島の たしづひらの 田染平野に所在し、古くから集落の境を成してきた岩峰群で、大穴の開いたウトノアナ（洞ノ穴）と中腹が赤色に染まった岩峰のゼゼノサマ（善神王ノ様）から成り、古代、中世、近世にわたる信仰などと結び付いた風致景観として意義深い。



提供：豊後高田市

「寺院境内に開口部があり、内部に高さ約13mの「大広間」と呼ばれる空間を持つ鍾乳洞」

5 金武鍾乳洞（日秀洞）【沖縄県国頭郡金武町】

5つの洞穴からなる洞穴群の1つで、16世紀前半に創建された観音寺の境内に開口部の1つがある。東西約40m、南北約40m、高さ最大約13mの「大広間」と呼ばれる空間を持ち、古くから人々に知られ、景勝地としても広く認識されるようになった。



提供：金武町

《重要文化的景観の新選定》

「近世に磁器を庶民に普及させた肥前の窯業集落と共に発展した農業集落」

1 波佐見中尾皿山と鬼木棚田の文化的景観【長崎県東彼杵郡波佐見町】

肥前において、近世に大量生産により磁器を普及させた窯業集落と、同時期に棚田を拡大させた隣接する農業集落から成る。窯業とこれに伴う住まいの変遷、伝統的な水利の仕組みを持つ棚田と農家の住まいのあり方、両集落の互恵的関係を伝える。



提供：波佐見町

# 史跡名勝天然記念物の指定等

## 《特別史跡の新指定》 1 件

### 1 恭仁宮跡（山城国分寺跡）【京都府木津川市】

天平12年（740）に聖武天皇が遷都を宣言し、以後3年3ヵ月、平城宮に替わって営まれた宮都が恭仁宮であり、平城還都後に山城国分寺がその地に造営された遺跡である。恭仁宮は、聖武天皇が自らの鎮護国家思想実現に向けて宣言した国分寺建立の詔や、古代国家の土地制度について大きな転換点となった墾田永年私財法が出された、奈良時代を象徴する政治舞台である。

平城宮から大極殿が移築され、その大極殿が廃都後に山城国分寺に施入されてその金堂となる等、宮跡を国分寺とした類のない遺跡である。現在も大極殿基壇や国分寺の塔基壇が残り、さらに長年にわたる京都府教育委員会、木津川市（旧加茂町）教育委員会の発掘調査によって朝堂院や2つの内裏地区といった宮の施設、山城国分寺の僧房と想定される建物遺構等が検出されており、特徴的な構造を持った宮であり、かつ伽藍中樞が保存されている国分寺の遺跡であることが判明している。

近年では、『続日本紀』に記される元日朝賀の記事を裏付けるような幢旗の遺構が検出され、また2つの内裏地区の造営に時期差を求める考えが出されるなど、奈良時代の具体的な政治の動きを物語る貴重な遺跡である。古代宮都の変遷やあり方を伝え、国分寺として鎮護国家思想を体現した場となる等、学術上の価値が非常に高く、我が国の歴史を知る上できわめて重要な遺跡である。

## 《史跡の新指定》 6 件

### 1 出羽金沢城跡【秋田県横手市】

出羽金沢城跡は、横手盆地内の要衝の地に築かれた群郭式構造の大規模な山城で、室町期は南部氏、戦国期は国人領主金沢氏の本拠の城であるとともに戦国大名小野寺氏や六郷氏勢力における境目の城として機能した。

戦国時代の北東北地方は一国を統一する大名は生まれず、小野寺氏や六郷氏のように比較的大規模な領主が独立性の強い中小規模の国人領主と緩やかな関係を結び秩序を保っていたと考えられる。こうした関係は、大規模領主の動向によって変化したため、各地での抗争が常態化していた。南部氏と小野寺氏、六郷氏と小野寺氏といった大規模領主の勢力圏の境界であり、かつ交通の要衝に位置する金沢城は、その立地上の事情からこの地域では突出した規模を持つ群郭式構造の山城として整備されたと考えられる。

出羽金沢城跡は、戦国期の出羽国の政治的、軍事的な情勢とその変化を知ることができる城郭として重要である。また、城跡の保存状況も良好であり、我が国における中世後半から近世初頭にかけての築城技術を知る上でも重要である。



## 2 おおがじょうあと やまがたし 大桑城跡【岐阜県山県市】

みののくに と き 美濃国守護土岐氏により築かれた山城跡と城下からなる遺跡。土岐よりのり頼芸と頼武・頼充よりのたけ よりみつとの間で繰り広げられた家督争い、そして斎藤さいとうどうさん道三による頼芸追放に至るまでの美濃国の騒乱の舞台ともなった城跡で、その評価については諸説あるものの、天文4年（1535）から頼充が死去する同16年までの間、守護所若しくは土岐氏の重要な拠点として機能した。

しこくぼり き ど 四国堀と呼ばれる木戸の内側に城下町が展開し、木戸の外側には土岐氏の菩提寺である南泉寺などが所在する。最奥部にある大桑城は、保存状態が良好で、伝岩門跡の巨石でんいわもんを用いた門や、居住空間として機能したと考えられる曲輪群、庭園跡が発掘された伝台所跡でんたいどころをはじめとする曲輪や防御施設が、北東から南西に延びる主尾根筋や、主尾根を挟んで北側の比較的傾斜が緩やかな谷筋を中心に残る。

16世紀前半から中頃に機能した政治的空間と居住空間を備えた守護の拠点城郭であり、戦国時代における守護大名の本拠地の構造を知るだけでなく、美濃国騒乱の舞台となった城でもあり、周辺諸国の諸勢力の動向も含めた、当時の社会的、政治的動向を知る上でも重要である。

## 3 いなばのくにさんいんどうあと とっとりし 因幡国山陰道跡【鳥取県鳥取市】

因幡国山陰道跡は、7世紀後半から8世紀にかけて古代国家が都を起点に全国に張りめぐらせた七道しちどうえきろ駅路のひとつで、地図や航空レーザ測量データ等の様々な地理情報と分布調査、発掘調査により、全長3kmにわたって、その実態を解明した。

平野部においては、脆弱地盤に敷葉・敷粗朶しきば しきそだ工法を用いて盛土により道路を構築することや、路肩の補強のため杭の打設や石を貼り付けるなどの様々な工法を用いていることが明らかになった。また、条里制地割じょうりせいちわりと一体的に道路が敷設されていることや、柳の並木が検出されるなど、古代官道の沿線景観の一端が明らかになった。

山間部では、傾斜が緩やかな部分では、切土や盛土を伴う大規模な土木工事により、直線的に道路を敷設しているが、急傾斜地ではつづら折りで敷設されていることが明らかになった。

古代官道において、はじめてつづら折りの道路が確認された例であり、山間部における古代官道の路線復元を行う上でも重要な成果と言える。古代の土木技術だけでなく交通の実態を知る上で重要な遺跡である。

#### 4 羽衣石城跡 附 十万寺城跡 番城城跡【鳥取県東伯郡湯梨浜町】

羽衣石城は、戦国期伯耆国<sup>ほうぎのくに</sup>の国人領主で、主に東伯耆方面で活躍した南条氏<sup>なんじょう</sup>が拠点とした山城跡である。羽衣石山<sup>うえしやま</sup>の頂上に位置し、北に日本海、眼下には古代以来の流通の要衝であった東郷池<sup>とうごういけ</sup>と天神川<sup>てんじんがわ</sup>下流域右岸に広がる羽合平野<sup>はわいへいや</sup>、北西に天神川下流域左岸に広がる北条平野<sup>ほうじょうへいや</sup>、西に秀峰大山<sup>しゅうほうだいせん</sup>を望み、伯耆国東部一帯を見渡せる位置にあることから、東伯耆の拠点城郭として機能した。

山頂部の古城曲輪群<sup>こじょうくるわぐん</sup>を中心に、北から西にかけて二ノ上谷曲輪群<sup>にのうえのたにくるわぐん</sup>・八幡平曲輪群<sup>はちまんひらくるわぐん</sup>・上中谷曲輪群<sup>かみちゅうだにくるわぐん</sup>の3つの曲輪群が尾根上に放射状に展開する城郭で、その南北に大規模な土塁や堀を伴った十万寺城や番城城の出城を築き、戦闘に応じた築城技術を展開している。

発掘調査の成果から、石積や集石遺構<sup>しゅうせきいこう</sup>が検出され、その周辺から16世紀後半のものと推定される土器・陶磁器片<sup>てんしやう</sup>が出土している。天正8年（1580）から本格化する毛利氏・織田（羽柴）氏の攻防戦における最前線の城であり、戦国期における山陰地方の政治状況の変化を知る上で重要である。

#### 5 野中廃寺跡【高知県南国市】

香長平野<sup>かちょうへいや</sup>の水陸交通との結節点に8世紀中頃に建立された寺院跡。発掘調査により、法起寺式の伽藍配置<sup>ほつきじしき</sup>をとる金堂<sup>がらん</sup>、塔<sup>こんどう</sup>、中門<sup>ほりこみちぎょう</sup>、講堂基壇<sup>ほったてばしらたてもの</sup>の掘込地業<sup>そうぼう</sup>、掘立柱建物<sup>そうばしらたてもの</sup>による僧房2棟、付属の総柱建物<sup>そうばしらたてもの</sup>1棟が検出された。現状では、伽藍の実態が判明した四国唯一の寺院跡である。中でも金堂の規模は、四国の寺院の中でも突出しており、土佐国分寺<sup>とさこくぶんじ</sup>に匹敵する。また、主要伽藍の基壇は精緻な掘込地業を行うなど高度な土木技術を用いて建立された本格的な伽藍である。

出土瓦の中には土佐国分寺と共通するものが認められるとともに、周辺の古代の遺跡の方位が条里に規制されるのに対し、国分寺と野中廃寺のみが条里に規制されず、伽藍中軸線の方位も類似する。加えて、土佐国分寺が野中廃寺の真北に位置することなど、両者の間には強い関係性が認められる。諸国において国分寺の造営が、郡司<sup>ぐんじ</sup>クラスの氏寺<sup>うじでら</sup>の造営や修理に影響を及ぼしたことが、国分寺系瓦の分布などから推定されているが、野中廃寺はその典型的な事例と言え、古代における寺院造営を考える上でも重要である。

## 6 おきのえらぶじまこぼぐん 沖永良部島古墓群【おおしまぐんわどまりちょう 鹿児島県大島郡和泊町・ちなちよう 知名町】

よのぬしはか  
世之主の墓

しんじょうはななくぼ ばか  
新城花窪ニヤートウ墓

やじや ばか  
屋者ガジマル墓

あまみ ばか  
アーニマガヤトゥール墓

奄美・沖縄地域では、亡くなった死者を風葬し、その後骨を洗い、その骨を改葬する墓所を造るという葬制や墓制が営まれてきた。遺骨を納める墓所は、岩陰や洞穴を利用し、さらに岩壁を横方向に掘り込んで造られたが、こうした近世以前に造られた古墓は沖永良部島全域では現時点で110基が確認されている。

このような遺骨を納める墓所は奄美群島で多く見られるが、沖永良部島では琉球王国の影響を受け、削り出した岩壁や石積みの壁で囲まれた前庭を持ち、墓本体の上部に屋根構造を持つ大型石造り掘込墓が造られた。島内の大規模な古墓は、細部の意匠は異なるが、屋根や庭等の構造を共通にしている。島内最大規模の古墓は世之主の墓と呼ばれ、2重の前庭を持ち、墓口まで琉球石灰岩による参道を設けている。また鹿児島藩から派遣された代官が造営した伝承を持つ新城花窪ニヤートウ墓にも2重の前庭が築かれている。切妻形式の屋根や棟や軒を表現する屋者ガジマル墓や、墓本体に唐破風に似たレリーフや窓形を彫り込み、沖縄の近世墓と類似の構造を持つアーニマガヤトゥール墓も、前庭を持ち、屋根構造を表現する共通点を持つ。

このように4基の古墓は、奄美と沖縄、さらに九州南部等との文化交流を示す貴重な遺跡として重要である。

### 《特別史跡の追加指定》 3件

#### 1 ふじわらきゅうせき 藤原宮跡【かしはらし 奈良県橿原市】

じとうてんのう 持統天皇8年（694）からわどう 和銅3年（710）まで営まれた古代都城跡。藤原京跡の中心部に位置し、約1km四方の区画内にだいり 内裏、だいくでん 大極殿及び役所群が建てられた。今回、かんが 東方官衙北地区等条件の整った部分を追加指定する。

#### 2 みずきあと 水城跡【だざいふし 福岡県太宰府市】

てんじ 天智天皇3年（664）、唐・新羅の侵攻に備えて築造され、後にだざいふ 大宰府を守った防御施設。全長約1.2kmに及ぶ土塁と濠からなり、古代の軍事を知る上で貴重である。今回、大宰府側の濠のうち条件の整った部分を追加指定する。



### 3 <sup>だざいふあと</sup>大宰府跡【<sup>だざいふし</sup>福岡県太宰府市】

古代において西海道諸国（現在の九州）の統括と大陸外交の拠点として設置された役所跡。天智天皇2年（663）の<sup>さいかいどう</sup>白村江の戦いの後、<sup>はくそんこう</sup>水城や<sup>みずき</sup>大野城などが築かれ防備が強化された。今回、<sup>らいき</sup>来木地区の条件の整った部分を追加指定する。

## 《史跡の追加指定》 23件

### 1 <sup>にしつきがおかいせき</sup>西月ヶ岡遺跡【<sup>ねむろし</sup>北海道根室市】

北海道根室市街地の西郊外に所在する<sup>さつもん</sup>擦文時代後期を中心とする集落遺跡。第一ホニオイ川（キナトイシ川）の小谷に向かって舌状に突出した5つの台地上に、約300基の竪穴建物跡が凹地をなして点在する。擦文時代後期の代表的な遺跡として重要である。今回、条件の整った部分を追加指定する。

### 2 <sup>いそはまこふんぐん</sup>磯浜古墳群【<sup>おおあらいまち</sup>茨城県大洗町】

茨城県中部、<sup>なかがわ</sup>那珂川・<sup>ひぬまがわ</sup>湊沼川水系の河口部に所在する古墳時代前期～中期初頭の古墳群。前方後円墳2基、前方後方墳1基、円墳1基ほかの6基からなる。古墳時代前期から中期初頭の関東における地域の古墳の展開を考える上で重要な古墳群。今回、条件の整った部分を追加指定する。

### 3 <sup>こうずけのくに た ごんしょうそうあと</sup>上野国多胡郡正倉跡【<sup>たかさきし</sup>群馬県高崎市】

<sup>わどう</sup>和銅4年（711）に建郡された、上野国多胡郡の<sup>でんそ</sup>田租や<sup>すいこ</sup>出挙で徴収した稲などを収納する倉庫群跡。特別史跡多胡碑の真南約350mに位置し、発掘調査によれば正倉の創建は8世紀前半である。今回、正倉区画中央部の条件の整った部分の追加指定を行う。

### 4 <sup>なかせんどう</sup>中山道【<sup>あんなかし</sup>群馬県安中市】

江戸時代の五街道の一つで、江戸日本橋から<sup>ごかいどう</sup>草津宿<sup>えどにほんばし</sup>で東海道に合流するまでの街道。今回は、江戸から17番目の宿場坂本宿と18番目の宿場<sup>くさつしゆく</sup>軽井沢宿の間の<sup>うすいとうげ</sup>碓氷峠の<sup>ささざわじんばせぎょうしよ</sup>笹沢人馬施行所跡を追加指定する。

### 5 <sup>やなせふたごづかこふん</sup>築瀬二子塚古墳【<sup>あんなかし</sup>群馬県安中市】

群馬県南西部の碓氷川左岸に所在する古墳時代後期初頭に築造された墳長80mの前方後円墳。周囲には盾形の周濠、周堤、外周溝が巡る。関東において最も早くに横穴式石室を採用した大型の前方後円墳であり、新たな埋葬施設の東日本への展開を示す点で重要。今回、条件の整った区域を追加指定する。

## 6 <sup>いせき</sup>デーノタメ遺跡【<sup>きたもとし</sup>埼玉県北本市】

縄文時代中期後葉から後期中葉に営まれた大規模集落跡。台地の下には水場遺構を伴い、当時の植物資源の利用実態と生活の変遷を示している。東日本における縄文時代中期から後期に至る社会の変革と集落の様相を知るうえで重要。今回、条件の整った部分を追加指定する。

## 7 <sup>したの や いせき</sup>下野谷遺跡【<sup>にしとうきょうし</sup>東京都西東京市】

縄文時代中期後半の大規模な環状集落。墓と考えられる中央部の土坑群を取り囲むように、竪穴建物群と掘立柱建物群が直径150mの範囲で配置される。規模・内容とも南関東の同時期の集落では傑出しており、重要。今回、条件の整った部分を追加指定する。

## 8 <sup>しもてら おかん が いせきぐん</sup>下寺尾官衙遺跡群【<sup>ちがさきし</sup>神奈川県茅ヶ崎市】

神奈川県東部に所在する<sup>さがみのくにたかくらぐうけ</sup>相模国高座郡家と考えられる官衙遺跡群。正庁・正倉は7世紀末から8世紀中葉まで2期にわたって変遷し、その南西部には七堂伽藍跡と呼ばれる郡寺が所在している。今回、条件の整った部分を追加指定する。

## 9 <sup>しもてら おにしかたいせき</sup>下寺尾西方遺跡【<sup>ちがさきし</sup>神奈川県茅ヶ崎市】

弥生時代中期後半に営まれた環濠集落跡。出土遺物には土器のほか石器と鉄器があり、利器が石器から鉄器へと移行していく時期の在り方を示している。南関東における拠点集落であり、弥生時代中期社会の様相を知るうえで重要。今回、条件の整った部分を追加指定する。

## 10 <sup>ゆうだふんぼぐん</sup>夕田墳墓群【<sup>かもぐんとみかちょう</sup>岐阜県加茂郡富加町】

濃尾平野の北東端に所在する、突出部付の墳丘墓とみられる<sup>はすの</sup>蓮野1号墳（墓）、突出部付の墳丘墓の<sup>すぎぼら</sup>杉洞1号墳（墓）、前方後円墳の<sup>ゆうだちやうすやま</sup>夕田茶臼山古墳からなる2世紀後葉から3世紀中頃にかけて築造された墳丘墓及び古墳。弥生時代終末期から古墳時代初頭にかけての首長墓の変遷がわかる事例として重要。今回、条件の整った杉洞1号墳（墓）を追加指定する。

11 <sup>くまのさんけいみち</sup>熊野参詣道【<sup>おわせし</sup>三重県尾鷲市・<sup>わたらいぐんたまきちやう</sup>度会郡玉城町・<sup>たきぐんたきちやう</sup>多気郡多気町】

<sup>き い じ</sup>紀伊路

<sup>なかへち</sup>中辺路

<sup>こへち</sup>小辺路

<sup>おおへち</sup>大辺路

<sup>い せ じ</sup>伊勢路

<sup>くまのがわ</sup>熊野川

<sup>しちりみはま</sup>七里御浜

<sup>はな いわや</sup>花の窟

平安時代から中世・近世を通じて利用された熊野三山への参詣のための道の一つ。今回は、伊勢から熊野に向かう伊勢路のうち、旧伊勢国内の<sup>いしづつあん</sup>石仏庵（玉城町）、<sup>め き とうげみち</sup>女鬼峠道（多気町）、旧紀伊国内の<sup>や きやまこうじんどうあと</sup>八鬼山荒神堂跡及び<sup>ちややあと</sup>茶屋跡（尾鷲市）の3ヵ所を追加指定する。

12 <sup>おう み こく ふ あと</sup>近江国府跡【<sup>おおつ し</sup>滋賀県大津市】

<sup>こくちやうあと</sup>国庁跡

<sup>そうやまいせき</sup>惣山遺跡

<sup>あおえいせき</sup>青江遺跡

<sup>ちゅうろいせき</sup>中路遺跡

古代近江国の政治・経済の中心をなす遺跡で4つの遺跡群からなる。国庁跡と青江遺跡のうち条件の整った部分を追加指定する。国庁跡は、国庁東郭のさらに東の区画2ヵ所を、青江遺跡は、<sup>こくしかん</sup>国司館と想定される<sup>ついでい</sup>築地堀に囲まれた内部の大型建物跡西側を追加指定する。

13 <sup>く に きやうせき</sup>恭仁宮跡（<sup>やましろこくぶん じ あと</sup>山城国分寺跡）【<sup>き づ がわし</sup>京都府木津川市】

天平12年（740）に<sup>しょうむ</sup>聖武天皇が遷都を宣言し、以後3年3ヵ月営まれた宮都。平城還都後に<sup>だいくでん</sup>大極殿が<sup>やましろこくぶん じ</sup>山城国分寺に<sup>せにゆう</sup>施入された。<sup>だいくでんきだん</sup>大極殿基壇や国分寺の塔基壇が残り、発掘調査により<sup>ちやうどういん</sup>朝堂院や2つの<sup>だいり</sup>内裏相当の区画等が見つかるなど、古代宮都の変遷やあり方を伝える重要な遺跡である。今回は域内の里道や水路敷を追加指定する。



#### 14 <sup>いずみ こがねづか こふん</sup>和泉黄金塚古墳【<sup>いずみし</sup>大阪府和泉市】

大阪南部、泉州地域の信太山丘陵に所在する古墳時代前期末に築造された墳長94mの前方後円墳。周囲には周濠状の盾形区画地形が確認されている。後円部の埋葬施設から「景初三年」銘のある画文帯神獸鏡など多数の副葬品が出土した。古墳時代の政治や社会のあり方を知る上で重要。今回、条件の整った部分を追加指定する。

#### 15 <sup>た だ ぎんどうざん いせき</sup>多田銀銅山遺跡【<sup>かわ べ ぐん い な がわちよう</sup>兵庫県川辺郡猪名川町】

江戸時代に本格的な採鉱が始まり、近代にかけて継続的に銀・銅等の採鉱がおこなわれた鉱山跡。史料および遺構から平安時代以来の採鉱とその経営、変遷を窺うことができ、産業技術史を考えるうえで重要。今回、条件が整った部分を追加指定する。

#### 16 <sup>ふじわらきようあと</sup>藤原京跡【<sup>かしはらし</sup>奈良県橿原市】

<sup>すざく おおじあと</sup>朱雀大路跡

<sup>さきようしちじょういち に ぼうあと</sup>左京七条一・二坊跡

<sup>うきようしちじょういち ぼうあと</sup>右京七条一坊跡

持統天皇8年（694）から和銅3年（710）まで営まれた古代の都城跡。中心にある藤原宮跡は特別史跡となっている。朱雀大路跡は宮の正門である朱雀門から南へ延びる道路跡で、それを境に東側を左京、西側を右京に区分する。今回、左京七条二坊跡で条件の整った部分を追加指定する。

#### 17 <sup>まきむく こふん ぐん</sup>纏向古墳群【<sup>さくらいし</sup>奈良県桜井市】

奈良盆地東南部に位置する古墳群で、弥生時代終末期から古墳時代前期初頭の定型化以前の前方後円形の墳丘を持つなど、我が国の国家形成期の様相を知るうえで重要。今回、現在史跡指定されている纏向石塚古墳、ホケノ山古墳の2基に、条件の整った矢塚古墳と勝山古墳を追加指定する。

#### 18 <sup>しんぐうじようあと</sup>新宮城跡 <sup>つけたり</sup>附 <sup>みずのけぼしよ</sup>水野家墓所【<sup>しんぐうし</sup>和歌山県新宮市】

関ヶ原の戦い後に浅野氏が築城し、近世には和歌山藩主徳川家の付家老で、大名に準じる待遇を得た水野家歴代の居城跡である。指定地西側隣接地に位置し、城の大手にあたる部分を追加指定する。

## 19 ちくごこくふあと 筑後国府跡【くるめし 福岡県久留米市】

7世紀後半の前身官衙、7世紀末のⅠ期国庁、8世紀中頃のⅡ期国庁、10世紀前半のⅢ期国庁、11世紀末のⅣ期国庁までのそれぞれの規模と変遷が明らかな国府跡であり、古代筑後国ちくごのくにの政治情勢を考えるうえできわめて重要。条件が整った部分を追加指定する。

## 20 すぐおかもと いせき 須玖岡本遺跡【かすが し 福岡県春日市】

福岡平野の南部に所在し、弥生時代中期から後期にかけての墓域、青銅器工房、居住域からなる『後漢書東夷伝』に登場する「奴国」なこくの中心地とされる遺跡。今回、条件の整った青銅器工房域等を追加指定する。

## 21 ごしょやま こふん 御所山古墳【みやこぐんかんだまち 福岡県京都郡苅田町】

福岡県京都平野みやこへいやの北側に所在する、5世紀後半に築造された墳長約119mの前方後円墳。3段築成でくびれ部に造り出しが付く。その規模は石塚山古墳いしづかやまとともに豊前地域ぶぜんで最大級であり、地域首長の動向やヤマト政権との政治的関係を知る上で重要。今回、条件の整った部分を追加指定する。

## 22 ちやうじゃ や しきかん が いせき 長者屋敷官衙遺跡【なか つ し 大分県中津市】

古代豊前国ぶぜんのくに下毛郡衙しもつみけぐんが（郡家）ぐうけの正倉と推定される官衙遺跡。正倉院の規模および建物配置とその変遷が判明している。今回、大型の掘立柱建物を中心とする官衙関連遺構が確認できた部分を追加指定する。

## 23 こぐまやまこふん 小熊山古墳・おとうやまこふん 御塔山古墳【きつきし 大分県杵築市】

別府湾北岸べつぷわんに所在し、小熊山古墳は九州最古級の円筒埴輪が出土する古墳時代前期前半の大型前方後円墳、御塔山古墳は近畿に由来する様々な形象埴輪が出土する中期前半の大型円墳である。九州における古墳の出現と展開を考える上で重要。今回、小熊山古墳の条件の整った部分を追加指定する。

## 《名勝の新指定》 1 件

### 1 静川園【青森県北津軽郡中泊町】

静川園は、津軽半島の中央部に位置する中泊町尾別の旧家宮越邸の近代住宅庭園である。宮越家は近世以来の長い伝統を有する大宅で、地域振興にも尽力し、近代地主として様々な事業に取り組んで資産を蓄えた。

9代目の正治（1885～1938）は芸術文化にも強く関心を寄せ、広く文化人との交流を図り、中でも橋本関雪（1883～1945）と親交を深めた。正治は、大正9年に離れ「詩夢庵」を建ててその廻りに配石と植栽を備え、併せて大正15年頃までに築山池泉の大きな庭園を九分通り竣成するとともに、昭和6年頃まで整え続けた。

宮越邸の敷地に営まれた庭園は大きく3つの地割から成るが、広義にはこれらを総称して静川園という。築山池泉を成す逍遙本位の庭園は、大きな築山を地割の中心としてその周りに池泉を巡らしている。詩夢庵とこれを取り巻く観賞本位の庭は、南面して造られた枯山水のほか、居室に過ごしながらか風景を楽しむ内装の設えに特徴がある。特に涼み座敷の間の東窓を飾る「四季花木障子」は、季節とともに遷ろう窓外の景色を室内に取り入れて秀逸である。また、主屋南東側には大石武学流初期の庭園遺構を伝えている。

近代地主が、文化人との交流を通じて深められた芸術文化の趣向に基づき、自ら差配して造営した近代住宅庭園の事例として優れている。

## 《名勝の追加指定》 1 件

### 1 アマミクヌムイ【沖縄県那覇市・南城市】

琉球開闢神であるアマミクの伝説地。調査研究により特定された13か所のうち、既指定の9か所に、南城市の「薮薩ノ浦原」と「知念森（知念グスク）」、那覇市の「首里森及び真玉森」の4か所を追加する。これにより13か所中13か所の指定となる。

## 《天然記念物の新指定》 1 件

### 1 <sup>こしきしまかたのうら</sup>甕島片野浦のカノコユリ群落【<sup>さつ ま せん だい し</sup>鹿児島県薩摩川内市】

カノコユリは、日本から台湾や中国南部に及ぶ東アジアに分布するユリ科ユリ属の<sup>じせいしゅ</sup>自生種である。日本では福岡県や長崎県、鹿児島県、徳島県、高知県の山地の崖など限定された地域に生育しており、個体数は少ない。その中で、鹿児島県の甕島列島が日本における最大規模かつ高密度の生育地として知られている。

カノコユリは、江戸時代から明治期においては<sup>きゅうこうしよくぶつ</sup>救荒植物として利用され、明治初期には食用や薬用として中国に輸出された。19世紀前半にはシーボルトが日本から持ち帰り紹介したことで西洋において高く評価された。これを機に、園芸植物としての需要が高まり、明治後期から昭和期には球根が日本の主要な輸出品になり、様々な園芸品種がつくられた。オリエンタル・ハイブリッドとして有名な「カサブランカ」や「サマードレス」などの原種であり、日本を代表的するユリ属の植物のひとつである。

甕島列島は日本におけるカノコユリの主要な生育地であり、なかでも<sup>しもこしきしま</sup>下甕島南西部の片野浦に所在するみっちり草原は、カノコユリの日本最大規模の自生地である。みっちり草原は、土砂崩落後に成立し強風で維持されている自然草原であり、コシキギクなどの甕島固有種も生育するなど、植物生態学的、植物地理学的に高い価値を有することから、指定し保護を図るものである。

## 登録記念物の登録



## 《登録記念物（遺跡関係）の新登録》 1 件

### 1 <sup>あがり お う おき い せき</sup>東奥武沖遺跡【<sup>しまじりぐん く め じまちょう</sup>沖縄県島尻郡久米島町

東奥武沖遺跡は久米島の東部にある東奥武（<sup>あがり お う</sup>オーハ島）の東側から南側にかけての水深2m未満の海域に所在し、14世紀末～15世紀初頭の中国産青磁や白磁の碗・皿・盤などの食器類、中国産や東南アジア産の壺や甕などの貯蔵具が多数散布している。同種の陶磁器は沿岸を經由して島内に搬入され、尾根上に築かれた<sup>う え ぐすくじょうあと</sup>宇江城城跡などの陸域の遺跡においても大量に出土しており、海域と陸域の傾向が一致しているのが特徴である。当該期は琉球の明に対する朝貢貿易の回数・隻数がピークに達する時期であることから、明への朝貢貿易の最盛期を考古学的に裏付けるものであると考えられている。

これらの陶磁器は東奥武（<sup>あがり お う</sup>オーハ島）の南東方向に伸びる浅瀬を起点として北側と西側の海域に分布しており、この浅瀬において船舶が座礁・沈没し、積荷の陶磁器がその後の潮流の影響で広がっていった可能性が考えられ、水中遺跡における遺跡の形成過程を考える上でも重要である。

このように、東奥武沖遺跡は14世紀末から15世紀初頭における琉球の明への朝貢貿易の一端を裏付ける資料が海域に良好に残されているとともに、水中における遺跡の形成過程を考える上で重要である。

## 《登録記念物（名勝地関係）の新登録》 5 件

### 1 <sup>おのほら して いえん</sup>斧原氏庭園【<sup>にしのみやし</sup>兵庫県西宮市

斧原氏庭園は西宮市南部の住宅街に位置する。作庭家で庭園研究者の<sup>しげもりみれい</sup>重森三玲（1896～1975）は、昭和15年7月頃に三越大阪支店住宅建築部技師の<sup>おかだたかお</sup>岡田孝男から斧原氏の庭園の設計を依頼された。同年9月7日の重森の現場確認後、9月24日には設計図が出来上がり、10月から現場の工事が始まった。

庭園は建物の南側にあり、全体は長辺約23.5m、短辺最大約10mの長方形に近い形である。斧原氏の希望で、東側は花を植えたり芝生敷としたりするための空間とされ、西側が枯山水になっている。枯山水は、建物から見て手前に白砂の曲水、奥に築山を造り、築山には多くの立石を用いて石組を施している。逆S字形を描く曲水は、築山の左手の裾に端を発し、左から長く横にのびる奥の出島を回り込んだ後、右からのびる手前の長い出島を回り建物の前面に至る。奥の出島は芝生のみとし、手前の出島には当初5本のマツ類が直線状に植えられ、先端には石燈籠が据えられたが、その後マツ類は3本となり、石燈籠は失われた。平成7年1月に発生した阪神・淡路大震災で建物が被災し、その後建て替えられたが、庭園に影響が及ばないように新しい建物の平面配置は以前の形が踏襲された。

## 2 <sup>きよはら していえん</sup>清原氏庭園【<sup>あしやし</sup>兵庫県芦屋市】

清原氏庭園は芦屋市南西部の住宅街に位置する。昭和40年に、作庭家で庭園研究者の<sup>しげもりみれい</sup>重森三玲（1896～1975）の設計により造られた。重森は昭和15年に西宮市の<sup>おのはら</sup>斧原氏の庭園を設計したが、清原氏はその庭園を見て気に入り、自身の邸宅を建築する際に重森に設計を依頼したという。

庭園は、東西約10m、南北約6mの長方形で、周囲を建物に囲まれている。樹木を用いず、石、砂、コケ類を材料とする石庭で、中央部分に白砂とコケ類で雲のような形を表現し、その周囲に玉石、さらに外側に花崗岩の平石を敷く。石敷部分には北西から南東に直線状に青石の景石を8つ立て、雲のような形状の曲線と対照をなす。また、色彩も特徴的であり、白砂の白色、コケ類の緑色、玉石敷の灰色を中心とした色、平石敷の赤茶色、立石の青色など、それぞれの素材の色が意匠の中でよく引き立っている。平成7年の阪神・淡路大震災でも大きな被害はなかったが、平成22年に道路工事の関係で敷地の一部が削られて建物が建て替えられた。新しい建物の建築に際しては、建物の平面配置は庭園に配慮され、影響は沓脱石の移設のみにとどめられ、ほぼ旧状が保たれた。

## 3 <sup>きゅうたかはら していえん</sup>旧高原氏庭園【<sup>かさいし</sup>兵庫県加西市】

旧高原氏庭園は、加西市南西部の山裾に位置する。高原氏は、江戸時代後期にこの地に移り住んだと考えられており、木綿商や農業を営みつつ、その後金融業にも携わるようになった。6代目の<sup>たかはらじゅう たろう</sup>高原重太郎（1868～1933）は、米穀、肥料、石材、火薬など、多くの商品を取り扱って成功を収め、明治42年5月から自宅の「中座敷」の建築や庭園の整備に取り掛かった。工事は明治44年1月頃にほぼ完了した。

庭園は、東に舌状に突き出た山の南裾に沿うように造られており、大きさは東西最大約30m、南北最大約20mある。入口のある東側から西側に向かって狭くなっており、全体の約3分の2を占める西側の上段部と、それより高さが約1m低い東側の下段部から成る。上段部には「奥座敷」（明治20年代建築）があり、「奥座敷」から見て右手側と前面に庭園が広がる。右手側には「赤畳石」を敷き詰めた流れが設けられ、それは岩島のある前面の園池「<sup>うえ</sup>上の池」へとつながっている。下段部は「中座敷」を中心とし、その前面に中島のある「<sup>した</sup>下の池」が設けられている。「奥座敷」と「中座敷」の縁先からは飛石が縦横に打たれ、それらが上段と下段をうまくつないでいる。

#### 4 ウトノアナ・ゼゼノサマ【大分県豊後高田市】

ウトノアナ・ゼゼノサマは、国東半島南西部の田染に所在し、その最南部の田染平野における熊野集落と田野口集落の境地として南北に連なる岩峰群の東側、熊野集落から望まれる名勝地である。熊野集落は、古くは「大日岩屋」や「不動岩屋」として記載された熊野磨崖仏のある鋸山の北西麓にあり、行場が開かれた地域である。その成り立ちは、今熊野寺の坊集落で、その境域の西限には「赤岩」があったことが記されている。

赤く染まった岩壁の裾には、江戸時代に国見（現在の国東市国見）の赤根社から祠を勧請して善神王（ゼジンノウ／ゼンジョウオウ：武内宿禰のこと）を祀ったとされている。長く親しまれて来たこうした風致景観は熊野の耶馬として知られ、いまではウトノアナ（洞の穴）・ゼゼノサマ（善神王様）と並び称されている。ウトノアナ・ゼゼノサマは、麓を流れる熊野川から比高差約100mの火山碎屑岩から成る岩峰群の高所に空いた大穴と赤く染まった巨岩を特徴とする風致景観を成している。熊野集落から熊野社に向かう鳥居の辺りからは、右手に高さ70mほどのところに大穴を抱くウトノアナ、左手に高さ80mほどのところに赤い岩肌を見せるゼゼノサマを望む。

この地域における古代、中世、近世にわたる信仰などと結びついた特徴ある岩峰群の風致景観として意義深い。

#### 5 金武鍾乳洞（日秀洞）【沖縄県国頭郡金武町】

金武鍾乳洞（日秀洞）は金武町の南東部に位置する。5つの洞穴から成る洞穴群の1つで、東西方向に約200mのびる。いくつかある開口部の1つが観音寺の境内にあり、そこから内部に入ることができる。

16世紀前半に金武間切に漂着した真言僧日秀は観音寺を開創し、また鍾乳洞内に熊野権現を祀ったと伝わる。

戦時中には、沖縄戦において地元住民や沖縄本島中南部から逃れてきた人々の避難場所となったが、戦後は再び宗教的な空間となり、昭和30年代に、当時の観音寺住職により手摺や照明が整備されて一般に公開され、景勝地として広く認識されるようになった。

金武鍾乳洞は、琉球石灰岩が侵食されてできたもので、延長が約200mある。観音寺の境内にある開口部から下へ降りてゆくと、権現を祀る空間があり、そのまま進むとやがて「大広間」と呼ばれる空間に出る。「大広間」は、東西約40m、南北約40m、高さ最大約13mの広さで、形成後数千年から数万年が経っていると考えられている。多数の鍾乳石や石筍のある広い鍾乳洞の景観は非常に特徴的であり、訪れる人々を驚かせる。

## 重要文化的景観の選定等

## 《重要文化的景観の新選定》 1 件

### 1 <sup>は さ み な か お さ ら や ま</sup>波佐見中尾皿山<sup>お に き た なだ</sup>と鬼木棚田<sup>ぶ ん か て き け い か ん</sup>の文化的景観【<sup>ひ が し そ の ぎ ぐ ん は さ み ち ょ う</sup>長崎県東彼杵郡波佐見町<sup>お お む ら は ん</sup>】

波佐見町は、長崎県中央北東部の県境、山間部に位置し、近世に大村藩が重要産業とした窯業と稲作を現在も主産業とする。当該文化的景観は、町東部南端で隣り合う窯業集落である中尾郷と農業集落である鬼木郷から成る。

国内の磁器生産は近世初頭に肥前で始まり、皿山と呼ばれる窯業専門集落が、磁器の原料となる陶石と薪を生む山林を背景に、陶石を唐臼<sup>からうす</sup>で砕くための川と登り窯に適した急斜面をもつ谷に開かれた。近世初頭に集落が開かれた中尾皿山では18世紀には巨大な登り窯で安価な磁器を大量生産し、国内に普及させた。近代以降は技術の進展等に伴い、窯や職住一体の住まいを変遷させつつ窯業を発展させてきた。

鬼木郷は、山中の緩傾斜地にあり、近世初期には水田耕作がなされ、近世後半以降に中尾皿山の発展に合わせて棚田を広げたとされる。棚田は3本の河川が流れ合流する谷に広がり、田越し灌漑等の伝統的な水利の仕組みや石積みを集落全体としてよく残す。

中尾皿山は近代には都市的な様相を呈し、鬼木郷から中尾郷へ峠を越えて米や農作物・薪炭・梱包材となる藁製品の販売や下肥<sup>しもごえ</sup>の購入、高度経済成長期には農閑期に窯業の手伝い等も行われた。

当該文化的景観は、肥前において磁器生産及び窯元をはじめとした住まいの変遷と、伝統的な水利の仕組みを持つ棚田と農家の住まいのあり方を、集落全体として伝えることに加え、両集落が窯業と農業を主産業とする地域の発展のあり方を伝え、貴重である。

## 《重要文化的景観の追加選定》 1 件

### 1 <sup>で ん と う き ん だ い か い た く</sup>アイヌの伝統と近代開拓による沙流川流域<sup>さ る が わ り ゆ う い き</sup>の文化的景観【<sup>ぶ ん か て き け い か ん</sup>北海道沙流郡平取町<sup>さ る ぐ ん び ら と り ち ょ う</sup>】

<sup>ひ だ か</sup>日高山脈西麓に広がる自然環境を基盤とし、先史時代以降の人の営み、アイヌ文化の諸要素、開拓期以降の農林業に伴う土地利用によって重層的に形成されてきたことがアイヌ民族のイウオロという伝統的な生活領域を通して理解することができる貴重な景観。